

III. 北方領土問題に係る参加・体験型学習プログラムへの参加者のニーズ

1. 参加・体験型プログラム参加者へのヒアリング調査結果

(1) 実施概要

① 調査目的

北方領土問題に係る参加・体験型プログラムの利用実態、利用者サイドから見た評価やニーズ等を明らかにし、修学旅行等における参加・体験型プログラムの利用拡大、ひいては修学旅行等の誘致拡大を検討する際の知見を得ることを目的として、参加・体験型プログラムの参加経験者を対象としたヒアリング調査を実施した。

② 調査対象

実際に修学旅行において北方領土隣接地域を訪問した高校、並びに四島交流事業において実際に現地を訪問した高校の教員を対象にヒアリング調査を実施した。調査結果の一部には、旅行代理店を対象としたヒアリング結果も含まれる。

なお、ヒアリング調査の対象とした団体は下表のとおり

図表 III-1 調査対象団体一覧

- | |
|---|
| <p>■ 修学旅行による北方領土隣接地域訪問校</p> <ul style="list-style-type: none">・中央大学杉並高等学校（東京都杉並区）・千葉黎明高等学校（千葉県八街市）・大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎（大阪市天王寺区）・皇學館高等学校（三重県伊勢市） <p>■ 四島交流事業による現地（北方領土）訪問校</p> <ul style="list-style-type: none">・青森県立三沢高等学校（青森県三沢市）・青森県立金木高等学校（青森県五所川原市）・神奈川県立横浜栄高等学校（横浜市栄区）・香川県立観音寺第一高等学校（香川県観音寺市） <p>■ 旅行代理店</p> <ul style="list-style-type: none">・株式会社日本旅行・近畿日本ツーリスト株式会社 |
|---|

(2) 調査結果 【★】印の項目には一部、旅行代理店ヒアリングの結果を含む

① 修学旅行及び四島交流事業の訪問・参加経緯

- ・ 修学旅行の訪問先や実施内容は、学年教員による提案を発端とする場合が多い。一方、四島交流事業では、特定の学校や教員に参加要請がある場合が中心となっている。
- ・ 修学旅行で北方領土隣接地域を訪問先として選定する際には、宿泊施設や移動距離に伴う自由活動の制約、北方領土問題に対する一部の偏った認識等への対応などが支障になることがある。

<ヒアリング結果要旨>

■ 修学旅行の訪問先や実施内容は、学年教員からの提案が発端となる

- * 修学旅行の目的や訪問先の選定は、学年主任を中心に学年の教員で検討し、教員会で承認を得て決定する。(教育機関A)
- * 修学旅行の訪問先は、学年教員の提案を校長や理事長が決裁する。(教育機関B)
- * 基本的な地域は学校側で決め、各地域での訪問先や体験プログラムは生徒の提案に基づき、教員とともに決める。(教育機関C)
- * 北方領土問題を修学旅行に組み込んだのは、担当教員の関心。国家を意識した教育を行っていることも、北方領土問題に目を向ける理由である。(教育機関D)

■ 修学旅行での北方領土隣接地域の選定に際し、宿泊施設、自由活動の制約、一部の偏った認識が支障となっている

- * 北方領土返還を求めることが目的ではないので、北方領土隣接地域訪問に対する反対意見は出なかった。しかし、生徒が自由活動を楽しめる地域ではないため、他の教員の理解を得ることが大変だった。(教育機関A)
- * 宿泊地から見学施設等までの距離、宿泊施設の確保に苦慮した。(教育機関B)
- * 本校では生徒の希望によってテーマを設定するため、保護者からの抵抗はない。しかし、同問題に対する偏った認識もあることから、教員側は神経を使っている。(教育機関C)
- * 北方領土問題を修学旅行のテーマとすることに対し、特に保護者等から反対の声はなかった。北方領土問題のみがテーマになれば、反対意見もあるかもしれない。(教育機関D)

■ 四島交流事業の参加は、特定の学校・教員への参加要請によるものが多い

- * 県内他高の校長から参加要請の連絡があった。(教育機関E)
- * 教育委員会から社会科教員の研究部会長であった校長宛に参加要請があった。(教育機関F)
- * 教育委員会から学校に参加要請があり、県の地理の教員の会で活動していた教員が担当することになった。(教育機関G)
- * 教育委員会からの公募に対応する形で参加した。そもそも四島交流事業に興味があった。(教育機関H)

② 修学旅行及び四島交流事業の訪問・参加目的

- ・ 北方領土隣接地域における修学旅行の目的は、「自然」「歴史」「産業」「国境問題」「平和」がキーワードとなっており、特に道東地域においては「自然」と「環境」が重視されている。
- ・ 一方、四島交流事業では、日本人と北方四島在住ロシア人との交流を通じて、お互いの立場の理解を深め、北方領土問題の解決に寄与するために真の友好親善を図ることが重視されている。

<ヒアリング結果要旨>

■ 北方領土隣接地域を訪問する教育施設の修学旅行の主な目的は「自然」「歴史」「産業」「国境問題」「平和」、特に道東地域では「自然」や「環境」がキーワードとなっている

- * 「自然」「歴史」「地域産業」「国境問題」の4つを学習テーマとして設定。道東コースでは、北方領土問題をメインテーマとして位置づけている。(教育機関A)
- * 修学旅行の目的に「平和学習」を入れることになっており、道東地域を訪れた際は、北方領土問題を学習テーマに掲げた。(教育機関B)
- * 修学旅行に学年全体での統一的な学習目的はなく、生徒自らが研究したいテーマについて学習する。道東地域では、「自然体験」「行政と環境保護」「観光産業と自然」「漁業や酪農」等の研究テーマを掲げる生徒が多い。ただし、根室を訪れる場合は、生徒の希望の有無を問わず、北方領土問題を学習テーマとする。(教育機関C)
- * 修学旅行の第一目的は観光で、その他に北海道神宮への参拝や平和問題の学習も目的としている。(教育機関D)

■ 四島交流事業では訪問そのもの（在住ロシア人との真の友好親善）が目的である

- * 経験や体験を重視するため、現地を見て感じることで、現地の交流することを目的として生徒と共有した。(教育機関E)
- * 生徒の北方領土問題に対する知識は浅いので、物見遊山を基本的な目的とした。(教育機関G)
- * 生徒には、社会問題に目を向けてもらうとともに、現地で得た経験を周囲の人々に話さず、いって欲しいと事前に伝えた。(教育機関H)

③ 修学旅行及び四島交流事業の実施内容

◇ 訪問施設・学習内容

- ・ 修学旅行では、主に「北方四島交流センター」「納沙布岬」「北方館」「標津サーモン科学館」「花咲港」「国後展望閣」等の施設が活用されている。
- ・ また、上記の施設等において、「元島民の話」や「施設・展示の見学」等の参加・体験型学習プログラムが実施されている。

<ヒアリング結果要旨>

■ 修学旅行における主な訪問先は「北方四島交流センター」「納沙布岬」「北方館」「標津サーモン科学館」「花咲港」「国後展望閣」である

■ 参加・体験型学習プログラムは「元島民の話」や「施設・展示の見学」が中心となっている

* 4泊5日で実施。道東地域を選択した生徒は、女満別空港から南下するコース、釧路空港から北上するコースに分かれて道内を移動した。両コースともに根室に2泊し、道内はバスで移動した。(教育機関A)

* 北方領土隣接地域では、「北方四島交流センターにおける元島民による講習会・展示見学」「納沙布岬の訪問」「北方館での歴史学習」「花咲港でのサンマ水揚げ見学」「標津サーモン科学館の訪問」等を行った。(教育機関A)

* 宿泊地を基点に網走から根室に向かうコース、釧路から根室に向かうコースに分けたが、移動距離の問題から納沙布岬まで行けなかったクラスもあった。北方四島交流センターでは、担当者の説明に加え、15分ほどの映画を視聴した。この他、野付半島やネイチャーセンターを訪問した。(教育機関B)

* 道東地域を選択したグループは、例年「標津サーモン科学館」「網走監獄」「北方民族博物館(網走)」「釧路湿原野生生物保護センター」を訪れる。根室では「北方四島交流センター」「北方館」「納沙布岬」を訪れ、語り部の話を聞いたこともある。(教育機関C)

* 時間的に厳しいが、ほぼ毎回、納沙布岬までは行く。標津町の「国後展望閣」で昼食後、北方領土を望みながら元島民の話を聞いたり、北方館の館長から話を聞く。(教育機関D)

◇ 事前・事後学習の実施内容

・ 修学旅行における事前学習は、関連映画の視聴、図書館への関連書籍コーナーの設置、外部有識者による講演など、様々な取り組みが行われている。特に、大学受験の必要がない学校では充実しているものの、授業内での実施は敬遠されている。

・ 四島交流事業においては、参加する生徒が少数であることや準備期間が短いこと等から、具体的な事前学習は実施されていない。

・ 一方、事後学習に関しては、修学旅行及び四島交流事業ともに、事前学習に比べると感想文の作成など濃度の薄いものになっている。

<ヒアリング結果要旨>

■ 修学旅行における事前学習の実施内容・程度は多様であるが、授業内での十分な実施は難しい

* 事前学習は1年程度をかけ、ロングホームルームの時間を活用して生徒全員に映画(「氷雪の門」「海峡」「幸福の黄色いハンカチ」「北の零年」)を見せたり、感想文を提出させたほ

か、関連書籍等のコーナーを図書室に設けた。また、現地フェリー会社の担当者による説明会、根室の青年会議所の出前講座、校内での都民会議のパネル展、映画監督や大学教員によるレクチャーなどを実施した。大学受験がない附属校なので、こうした自由度のある事前学習が実施可能である。さらに、北方四島交流センターでの参加・体験型学習プログラムはとてもなく、同館から提供頂いた館内で上映している DVD も事前学習に効果的であった。(教育機関A)

* 事前学習としては、訪問予定施設から提供された資料を使用し、ホームルームの時間に歴史等を説明した。社会科の教員から、北方領土問題を授業では扱いにくいとの指摘があり、十分な事前学習はできなかった。(教育機関B)

* 事前学習は、自主的な研究とグループ別の準備が中心となる。道東地域を選択した生徒には、全体研修でアイヌ民族の歴史等について説明を行ったり、北海道や沖縄の歴史について、外部有識者の講演を実施した。根室市の協力の下、根室の高校生が大阪を訪れ実施した交流会に参加したこともある。(教育機関C)

* 事前学習は、全体で 12~13 時間を使用し、その中で北方領土問題には 5 時間程度を要する。各グループが自由なテーマを選んで調べ学習を行っている。以前、教材として映画「氷雪の門」を使用したこともあるが、見るのに 2 時間もかかるので時間的に厳しい。教材作成に際して、根室市からの資料提供を受けたことがある。(教育機関D)

■ 四島交流事業の事前学習の実施は、時間の制約等から実施が難しい

* 進学校では、受験用に組まれた教科の中で事前学習を行うことは難しい。(教育機関E)

* 学期末の時期に該当するため、事前学習を行う時間の確保が難しかった。(教育機関F)

* 時間がなかったこともあるが、生徒には構えて参加して欲しくなかったもので、事前学習はしなかった。(教育機関G)

* 高校で事前学習の時間を確保することは困難。中学校では可能であると思う。(教育機関G)

* 生徒の負担に配慮し、放課後に語学を中心とした事前学習を行った。(教育機関H)

■ 事後学習は、感想文の作成や訪問の報告程度で、事前学習と比較して濃度は薄い

* 事後学習は、生徒に訪問感想や写真を使って自らの体験をまとめさせ文化祭で展示。その際には、訪問コース別に競わせるなどし、生徒のやる気を喚起させた。(教育機関A)

* 事後学習は、特に何も行っていない。(教育機関B)

* グループ毎に研究をまとめ、年末に報告書を作成している。優良な報告は、学年全体で発表会を行い、他の地域を訪問した生徒も情報を共有する機会を設けている。(教育機関C)

* 事後学習としては、修学旅行の感想文を生徒に書かせており、年によっては和歌を作らせて文集にしたこともあった。(教育機関D)

* 授業において、事前・事後学習に十分な時間を確保することは難しい。(教育機関C)

* 生徒に感想文は書かせたが、事後学習までは行っていない。(教育機関H)

④ 修学旅行及び四島交流事業に対する生徒の評価

- ・ 北方領土隣接地域における修学旅行に対する生徒の評価は総じて高い。中でもリアリティある「元島民の話」、近隣の河川での「カヌー体験」、船上や海岸部からの「北方領土の眺望」に加え、北方四島交流センター館内で放映される DVD の視聴や、花咲港でサンマの水揚げを見学し食べる等の体験は、生徒から高い満足度が得られている。
- ・ 四島交流事業では、「元島民の話」に加え、現地でのスポーツや会話を通じた「同世代との交流」に対する生徒の満足度が高くなっている。
- ・ 一方、生徒の評価が低いのは、修学旅行では北方領土隣接地域における「宿泊施設の質」や「移動距離の長さ」、四島交流事業では長時間にわたる「船での移動」と「船上泊」である。

<ヒアリング結果要旨>

■ 修学旅行で北方領土隣接地域を訪問した生徒の評価は総じて高く、特に「元島民の話」「カヌー体験」「北方領土の眺望」「北方四島交流センターで放映される DVD」「水揚げされたサンマを食べる」等の体験への満足度は高い

- * 訪問後の生徒の評価は相対的に高く、特に保護者からの評価は高かった。特に生徒の評価が高かったのは、厚岸周辺の川でのカヌー体験、船上からの北方四島の眺望、漁港で水揚げされたサンマを食べたことであった。(教育機関A)
- * 単に「行って見た」という程度の印象に留まっている。(教育機関B)
- * 根室地域を訪れた生徒の満足度は総じて高い。特に、北方四島交流センターの担当者の説明や館内で見た高校生が作った映画、語り部の話には、強い印象を抱いたようだ。また、風蓮湖でカヌーをしたグループの満足度も高かった。(教育機関C)
- * 相対的に生徒の評価は高い。特に、実際に北方領土問題を抱える地域を訪れ、そこで元島民の話を聞いたり、展示を見たという経験は大きいと思う。(教育機関D)

■ 四島交流事業では「元島民の話」「現地の同世代との交流」の満足度が高い

- * 事前研修の際の元島民の話はリアリティがあって生徒の評価が高かった。(教育機関E)
- * 事前研修会は、事前に情報をインプットできる点で効果的であり、特に元島民の話は、リアリティある歴史的経緯等に関する話を聞け、生徒の評価も高かった。(教育機関F)
- * 現地の同世代の子供達とのスポーツ交流は楽しかったようだ。(教育機関F)
- * 現地の同世代の子供達との交流はインパクトがあったようだ。(教育機関G)
- * 元島民の話や墓参りの印象が強かったようだ。(教育機関H)

■ 修学旅行では「宿泊施設の質」「移動距離の長さ」への不満が多い

- * 生徒の評価が低かった点は、宿泊した根室のホテルの印象である。(教育機関A)

* 移動距離が長いために、希望する施設や参加・体験型学習プログラムに制約が生じる。(教育機関C)

* バスの移動時間の長さは満足度が低い。実際、最終日には10名近い生徒が体調を崩しており、長時間の移動が負担になっている。(教育機関D)

■ 四島交流事業では「船での移動・宿泊」への不満が多い

* 船での長時間移動と宿泊は、生徒にとって厳しい環境であった。(教育機関E)

* 船の狭さや古さには不満であった。特に女子生徒には厳しい環境である。(教育機関F)

* 船中泊は体力的に厳しかったようだ。(教育機関G)

⑤ 修学旅行及び四島交流事業の成果

・ 北方領土隣接地域や現地を訪問することで、北方領土問題が身近で重要な問題である等の認識は深まったが、高校生に対して、それを伝える使命感が醸成されることを期待するのは難しいとの意見が聞かれた。

・ 教員は授業や各種会議等で、生徒も県民会議や文化祭等で訪問経験を発表している。こうした機会の有効性は認識されており、北方領土隣接地域や現地の訪問経験者が発表する場をもっと設けるべきとの要望がある。また、四島交流事業に関しては、訪問者の同窓会のような機会の設定も求められている。

・ 四島交流事業で現地を訪問し、現地のロシア人と交流したことで、北方領土問題の解決には、まずは市民レベルで交流することが重要であると考えようになった生徒もいる。

<ヒアリング結果要旨>

■ 北方領土問題に対する認識は深まったが、高校生に伝える使命感まで期待するのは難しい

* 生徒は、北方領土問題という社会問題が、根室からこれほど近いところにあるという点を発見したようだ。(教育機関A)

* 根室を訪れた生徒は、現地の人との交流を通じて北方領土問題が他人事ではなくなり、意識は高まったが、それが行動に繋がる段階までには至っていない。(教育機関C)

* 実際に北方領土隣接地域を訪問するので、北方領土に関する知識や理解が深まったのは確かである。しかし、北方領土問題は1テーマであるし、高校生に当該問題を伝えようという使命感が芽生えるほどの成果を求めるのは難しい。(教育機関D)

* 生徒は、北方領土問題について「知る」ことの重要性を認識したようだ。(教育機関F)

* 生徒の北方領土問題に対する認識は深まったが、それを伝える使命感までは生まれていない。(教育機関G)

■ 生徒・教員は訪問の体験を授業や報告会等で活かしているが、そうした機会の更なる充実が望まれている

* 訪問後に、北方領土返還要求全国大会に登壇させてもらったり、中学生に対する模擬授業

を担当させてもらうなど、生徒や学校としても様々な機会を持つことができた。(教育機関A)

- * 短時間ではあったが、授業の中で訪問経験を活かした話ができただのは良かった。(教育機関E)
- * 現地を訪問した生徒2名は県民会議で、教員も北方領土教育者会議で訪問経験をプレゼンした。こうした訪問経験者の発信の場をもっと確保すべきである。(教育機関E)
- * 訪問後に、県民大会で生徒が訪問報告を行った。生徒はこうした機会を望んでいる。また、現地で仲良くなった他校の生徒との同窓会等を開催し、意見交換等を行うことは有効であると思う。(教育機関G)
- * 教員は、紀要や会報の他、県の社会科の教員の会合で訪問の報告を行った。(教育機関G)
- * 教員としても訪問経験を伝えたいが、まだそうした機会がない。(教育機関F)
- * 教員は、文化祭や授業において訪問経験を報告した。(教育機関H)

■ 市民レベルでの交流促進の重要性を認識

- * 生徒は、まずは両国の住民レベルで交流することが重要であるという意識が高まった。住民同士が仲良くなり、その次のステップとして、返還という話があるべきだという意見が生徒からは聞かれた。(教育機関E)
- * 生徒は現地の方と交流したこともあり、まずは市民同士の交流を促進し、その次に政治的な解決を図るべきと感じたようだ。(教育機関F)

⑥ 北方領土隣接地域における修学旅行の可能性【★】

- ・ 限られた期間で実施される修学旅行では、最寄り空港の便数の少なさや空港からの距離など北方領土隣接地域までの移動、北方領土隣接地域内での移動の不便さに伴う参加・体験型学習の制約が懸念されている。こうした状況に対し、旅費への補助に関する提案もなされているが、国の方針に従った修学旅行の実施に対する懸念から、教育機関からは否定的な意見も聞かれる。
- ・ もう一つの大きな懸念材料として指摘されたのが、学年規模の修学旅行に対応可能な宿泊施設がないことである。北方領土隣接地域内に宿泊拠点を置けないことは、移動時間との関係から滞留時間を短くし、ニーズは高まっているものの分泊の実施可能校が限られている現状を踏まえると、大きな問題として挙げられる。
- ・ 北方領土問題をメインテーマとした修学旅行の誘致の難しさが指摘されている。修学旅行を誘致するためには、北方領土以外の魅力的な参加・体験型学習のテーマを北方領土隣接地域内で設定したり、周辺の集客力と学習効果の高い資源や、宿泊拠点との連携が求められている。
- ・ 北方領土隣接地域内における魅力的な参加・体験型学習のテーマとしては、「食」「漁業」「自然」「産業」等が挙げられた。

- ・ 北方領土問題の学習要素としての情報に加え、北方領土隣接地域におけるその他の学習要素に関する情報が少ないことから、現地からの情報発信不足が指摘されている。

<ヒアリング結果要旨>

■ 北方領土隣接地域まで、また、北方領土隣接地域内での交通アクセスの利便性が懸念材料となっている

- * 道東地域は移動時間が長いため、十分な参加・体験型学習プログラムを行うことが難しい。(教育機関B)
- * 昨年から大阪→女満別便がなくなったことから新千歳空港経由となり、道東地域での訪問時間が短くなった。(教育機関C)
- * 道東エリアをまわると移動距離が長くなるので、女満別空港と釧路空港を使っている。しかし、便数が少ないので、伊丹→羽田→女満別、伊丹→羽田→釧路、中部国際→女満別だけでなく、伊丹空港から羽田空港を経由することもある(教育機関D)
- * コスト面から日数の短縮を検討中であり、そうなると移動時間が長い北方領土隣接地域での滞留時間の確保は難しくなる。(教育機関D)
- * 優れた学習施設があっても、移動時間を要する北方領土隣接地域を修学旅行に組み込むことは難しい。(教育機関G)
- * 当校の修学旅行のテーマは、「平和学習」「自然体験」「環境教育」であり、それに対応でき生徒と教員の満足感が得られるのは北海道か沖縄である。しかし、限られた教員数で移動距離を考えると沖縄が選択される。(教育機関G)
- * 北方領土隣接地域では、交通アクセスが最大のネック。釧路空港からは時間がかかるし、女満別空港の便数は少ない。北方領土隣接地域内では班別行動をできるインフラが整っていない。(旅行代理店A)
- * 修学旅行で北方領土問題について学んでもらうことを政策的に推進するのであれば、北海道までの航空移動に係る旅費等への補助を出すことも一案ではないか。(旅行代理店B)

■ 学年単位の規模に対応できる宿泊施設のなさがネックとなっている

- * 北方領土隣接地域には大型宿泊施設がないため、移動拠点を設けることができない。根室に宿泊施設を設けても、別海や中標津などに比べ、参加・体験型学習プログラムが少なく、そうしたプログラムを提供する周辺施設までの移動を考える必要が生じる。(教育機関A)
- * 学年単位での移動になり、分泊は行わない方針なので、その規模に対応できる宿泊施設がない。周辺地域の宿泊施設を選択することになるので、移動時間がますます長くなる。(教育機関B)
- * 根室に大型の宿泊施設がないことは、修学旅行を誘致する上では課題になる。(教育機関C)
- * 当校は全学年での移動が基本なので、北方領土隣接地域には、この規模に対応する宿泊施

設がないため、今まで宿泊したことはない。また、北方領土隣接地域での滞在時間も短くなる。(教育機関D)

* 分泊をしない高校では、一定規模の宿泊施設がない北方領土隣接地域への修学旅行は考えにくい。(教育機関E)

* 分泊はしないので、学年規模で泊まれる宿泊施設の存在が必須となる。(教育機関G)

■ 「北方領土問題」のみでは訴求力が弱いため、周辺地域の資源も含め、他の魅力的な参加・体験型学習テーマが求められている

* 歴史や文化をテーマとした修学旅行でも、京都や奈良と比較した場合は、優先度が低くなる。北方領土問題はオプション的なテーマとしかならない。(教育機関E)

* 北方領土問題をメインテーマとした修学旅行に、10万円以上払う保護者は少ない。あくまでオプションとしての位置づけになると思う。(教育機関F)

* 北方領土以外の学習テーマが不明で、知床と絡めても移動距離の問題があるので、修学旅行の対象地としては考えにくい。(教育機関H)

* 北方領土隣接地域への修学旅行に対する学校側のニーズは低い。北方領土を学習要素とする場合、体験を伴うメニュー化が重要で、北方領土以外の学習要素を見出すことも必要である。(旅行代理店A, B)

* 北方領土隣接地域への修学旅行誘致のトリガーとして、知床半島は有効である。(旅行代理店A)

* 道東地域の宿泊拠点である阿寒や屈斜路、ウトロ地域には参加・体験型学習プログラムがあるので、北方領土隣接地域は不利な状況にある。(旅行代理店B)

* 私学のテーマ性をもった小グループでの修学旅行は別として、一般の公立学校が数あるプログラムの1つとして、北方領土問題を取り上げることはあり得るが、メインテーマとして提案することは難しい。(旅行代理店B)

* 北方領土問題を主なテーマとするなら、充実した学習プログラムの作成が必要になるが、それでも大きな市場にはならない。(旅行代理店B)

* 阿寒など他地域から北方領土隣接地域に足を伸ばしてもらえるようなモデルルートを作成・PRすることは重要。その際、サーモン科学館や野付半島は核となる。ただし、あまり無理のある行程を設定しないことが重要である。(旅行代理店B)

■ 「食」「漁業」「自然」「産業」等に関連する参加・体験型学習プログラムが求められている

* 生徒は美味しい食べ物があると喜ぶため、「食」をアピールしていくことが、修学旅行を誘致する上で重要ではないか。(教育機関A)

* プログラムに組み込むことができなかったが、元島民のリアリティある話は学習効果が高いと思う。(教育機関B)

* 大阪では、農業に比べ漁業と接する機会が少ないことから、漁師と交流を持てる機会は魅力的である。(教育機関C)

* 生徒は、他地域の同世代の生活に関心があるので、高校生同士の交流は効果的である。(教育機関C)

* 滞留時間を確保するためには、もう少し魅力あるメニューを用意すべきである。自然体験や産業体験のメニューがあれば魅力的である。とりわけ、地域資源として「食」は魅力的であり、参加・体験型学習に取り入れるなどすれば可能性はある。(教育機関D)

■ 体験プログラムや学習要素に関する情報発信の弱さが指摘されている

* 標津町のような提供可能なプログラムの発信は効果的である。北方領土隣接地域では、プログラムの全体概要の情報発信が必要である。(教育機関C)

* 北方領土隣接地域には学習資源が少ないように思える。しっかりと情報が発信されていないのではないか。(教育機関F)

* 北方領土問題は魅力的な学習要素であるが、情報が十分に伝わっていない。(旅行代理店A)

* 北方領土隣接地域には宿泊施設が少なく、阿寒が宿泊拠点となる。このため、阿寒地域を含めた情報発信によって修学旅行を誘致することも一案である。(旅行代理店B)

■ その他

* 10万円を超えるようなら無理である。そこに国が補助金を出すとすると、国の方針に従わなくてはならないとの思いが生じるので止めた方がいい。(教育機関G)

⑦ 北方領土現地における修学旅行の可能性【★】

・ 北方領土現地における修学旅行の魅力は評価されている。しかし、その前提として、国からの支援を含めた宿泊や移動等の安全性の確保が挙げられている。

・ 実施期間や船移動等による制約から、修学旅行の場合は班別行動など小規模での実施が可能な教育機関や、小グループによる研修旅行等での可能性が示唆された。

・ また、修学旅行の場合は、現地で提供可能な参加・体験型学習プログラムを提示すること、特に現地の同世代との交流に対する要望が聞かれた。

<ヒアリング結果要旨>

■ 魅力は評価されているが、宿泊施設や移動等の安全性の確保が前提になる

* 興味深いのが、集団を受け入れるためのインフラ面に不安がある。(教育機関A)

* 船中泊になると、生徒の体調管理面から、修学旅行の実施は難しい。(教育機関B)

* 現地訪問に関心を示す生徒はいると思うが、安全面を担保するためにグループ別活動でも教員が引率することになる。内閣府から依頼があり生徒が希望すれば検討する。(教育機関C)

* 宿泊・移動・食事等の安全面が確保されることが必須条件になる。また、船による長時間の移動や宿泊は大きなネックである。(教育機関F)

* 船での移動・宿泊に対応できる体力や、安全性の面から、修学旅行の訪問先としては難しい。(教育機関H)

* 旅行代理店がパッケージを作るためには、安全対策が十分にとられていること、現地の移動の手配や保険の問題等、適切な国のバックアップが必要になる。(旅行代理店B)

■ **グループ単位での修学旅行など小規模な研修旅行としての可能性はある**

* 学校単位ではなく、個別の学習旅行であれば需要があるのではないか。(教育機関A)

* 興味深いのが、船で渡るので日数が必要となるし、学年単位での修学旅行は難しい。クラスやグループ単位で修学旅行を行える高校なら、可能性はあるかもしれない。(教育機関D)

* 班別行動等を積極的に行っている学校をターゲットにすべき。外国語科でロシア語を教える高校では、海外への研修や修学旅行も行っているので可能性はある。(教育機関E)

* 毎年、研究指定校を選定して、指定校から生徒を派遣する形にしてはどうか。(教育機関H)

* 非常に魅力的であり、関心を示す学校はあると思うが、班別行動が無理なので大人数で動ける体制づくりが必要になる。(旅行代理店A)

■ **現地での参加・体験型学習プログラムの検討が必要、同世代間の交流プログラムへのニーズあり**

* 現地の同世代との交流プログラムを重視して欲しい。(教育機関F)

* 自由行動が難しい中で、提供可能な学習プログラムの検討が必要である。(教育機関G)

* 自校のPRという面で学校側には魅力的であると思う。期間が長くなるので、地方自治体の研修旅行等で学生を募った方が良いのではないか。(旅行代理店B)

(3) 参加・利用側の認識や実態から見た修学旅行の誘致に係る課題の整理

(2) のヒアリング調査結果を踏まえて、参加・利用側の認識や実態から見た、北方領土隣接地域における修学旅行の誘致に係る取り組みへの示唆となる事項は、以下のとおり整理される。

① 地域への修学旅行誘致に関する事項

■ 小グループ活動が実施可能な教育機関をターゲットにした戦略的なプロモーションの展開

北方領土隣接地域における修学旅行誘致に係る最大のネックは、宿泊施設の不足と移動時間の制約にある。こうした状況を踏まえると、誘致のためのPRを幅広く行うのではなく、ある程度対象を絞ることが必須となる。具体的には、クラス単位や班別活動など小グループでの活動を重視した修学旅行を実施する教育機関をターゲットにし、戦略的なプロモーションを展開することが必要と言える。

■ 農業や漁業を営む一般の農家での分泊や移動時間の制約に対応したサービスなどの提供

北方領土隣接地域に修学旅行を誘致する際の最大のネックは、一定以上の規模に対応可能な宿泊施設の少なさと、空港から北方領土隣接地域の移動距離と地域資源間の移動距離の長さの2点である。

こうした問題への対応策としては、高額な投資が必要になるハード整備よりも、まずは持続性・継続性を担保する根本的な部分である、ニーズに対応した参加・体験型学習プログラムの充実や受入体制の整備など、ソフト面の強化の方が重要であると考えられる。例えば、宿泊に関しては分泊の受入体制の強化が必要であり、移動に関しては、隣接地域内での小回りの効く輸送サービスの充実やバスの中での講話など移動時間を活用した学習機会の提供といったサービスが想定される。

■ 周辺地域の集客力ある資源と連携した訴求力の向上

北方領土問題のみをテーマとした修学旅行では、集客が見込まれにくいと指摘されている。一方、周辺地域には、知床半島等の集客力のある資源や、阿寒等の宿泊拠点がある。こうした周辺地域の資源と、北方領土隣接地域における北方四島交流センター、北方館、納沙布岬等の主要資源とを連携させるとともに、次項に述べるような参加・体験型学習プログラムの導入によって、地域の訴求力を高めることが求められる。

■ 学習要素に対する情報発信力の強化

北方領土を含め、北方領土隣接地域の学習要素に関する情報の少なさが指摘された。こうした状況では、教育機関において、北方領土隣接地域が修学旅行の訪問先として候補に挙がりにくく、旅行代理店でも営業することが難しい。このため、北方領土隣接地域内の学習要

素を抽出・整理し、周辺施設の集客力ある施設と一体となった情報を、明確化したターゲットを中心に発信することが求められる。

② 参加・体験型学習プログラムに関する事項

■ 教育施設の目的に対応した参加・体験型学習プログラムの検討

北方領土隣接地域を訪問する教育機関の修学旅行の目的は「平和」「国際問題」「自然」「産業」に関連する参加・体験型学習であり、特に道東地域には「自然」や「環境」に関連する参加・体験型学習が求められている。北方領土隣接地域においては、こうした教育機関のニーズに対応した参加・体験型学習プログラムの検討が必要になる。

特に、生徒の評価が高い「元島民の話」を基本とした北方領土をテーマに組み込みながら、教育機関からのニーズが確認された「食」「漁業（産業）」「自然」をテーマとした参加・体験型学習プログラムの検討が重要と言える。

■ 教育施設の特性に依じた事前学習の支援

大学の附属校など受験対応の必要がない教育機関では、充実した事前学習が行われており、活用する資料等に対する要望も多様であると考えられる。一方、受験対応を基本にカリキュラムが組まれる高校では、事前学習のために十分な時間を確保することが難しい。こうした教育機関の特性に依り、多様できめ細かなニーズに対応できる教材提供や体制等に加え、短時間で効率的に実施可能な教材提供などの支援が重要になると考えられる。

■ 関心を持った生徒・教員が参加できる事後学習の機会の提供

事前学習と比較すると、事後学習の濃度は薄い。これは、時間を確保することの難しさによるものと考えられるが、事後学習に対するニーズが顕在化しているとは言い難い。しかし、北方領土隣接地域や北方領土を訪問した教員、生徒の一部には、自らの経験を伝える機会の確保に対する強いニーズがある。学習効果の高さや、経験者によるリアリティのある報告が北方領土問題の認知度向上に寄与することを踏まえると、事後学習の実施は重要である。したがって、北方領土隣接地域や現地を訪問することで、北方領土に関心を持った一部の生徒や教員のために、事後学習の場としての報告の機会及び発表を支援する教材等の提供が求められる。

③ その他の事項

■ 修学旅行以外に教育旅行も視野に入れた誘致の検討

北方領土隣接地域における修学旅行は、先に述べたように、学年単位ではなく小グループでの活動を実施する教育機関がターゲットになる。しかし、こうした教育機関は限られるため、例えば、ロシア語教育を実施する教育機関や地方自治体が主催する研修旅行など、修学旅行以外の教育旅行の誘致を視野に入れることも考えられる。